

[MRPノート]

「学生の成長」の可視化のこころみ(2) ～ループリックの評価項目の再考について～

眞部 真紀子・山村 涼子・岡 舞美・眞谷 智美
高松 幸子・山下 浩子

A review of Visualization of the Students' Growth (2) —Reconsideration of Rubric's Evaluation Items—

MANABE Makiko, YAMAMURA Ryoko, OKA Terumi, MAMIYA Tomomi,
TAKAMATSU Sachiko, YAMASHITA Hiroko

This study is to review the visualization of 'students' growth' on 'FoodProject I' and 'FoodProject II' activities. We used the "Rubric" to measure the growth of students. In particular, consider evaluation items of the Rubric.

By using the same evaluation items as "Food Project I" in the rubric of "Food Project II", "students' growth" is now less likely to appear. Rubric is suitable for evaluation of student participation type classes. It is thought that it can expect the appropriate self-assessment of the student by doing a description to use for an evaluation standard concretely by the Rubric.

Key words: the growth of students, visualization, Rubrics, evaluation standard
キーワード：学生の成長、可視化、ループリック、評価基準

はじめに

いまや、大学教育における学習成果の可視化への取組が活発に、大学だけでなく教育関係全体を巻き込み、その測定のための教育ソフトウェアが開発され、そして、大学においてはそれをサークル化したシステムの構築および導入が進んでいる。

また、文部科学省年度による平成19年度「大学教育改革の実施指針及び今後等に関する調査研究」調査報告書¹⁾によると、学習成果

の把握のために実施しているアセスメントは民間事業者等の検定試験や資格試験等（TOEIC等、TOEIC[®]等）とジェネリックスキル等の測定を含む大学向けのテストが多く、ループリックはその中に分類されている教授である。さらに、報告書ではループリックの評価について「学習目的のテストや、ループリックなどを採いた正解がある評価方法などもあるが、これらの評価については、大学のだけの評価になるため、客

教育評価という課題がある。」と記されている。

しかし、筆者らは、現状の「アードプロジェクト」の主要な部分をまとめた中の「学習目標と到達レベル」を学生が把握しやすいため、直感的学習の促進に資している。」および「増加傾向にある学生参加型授業での評価に資している。」という主張から、「学生の成長」を評価その可能性を「アードプロジェクト」で測定したいと考える。

目的

本報告は「教育」を引続き、ルーブリックを使って学生の成長を測定し、可視化することができる仕組みを構築することを目的とする。中でも評価項目に注目することとした。

アードプロジェクト1-1の概要

平成30年度入学生のカリキュラムでは、「アードプロジェクト1」、「アードプロジェクト2」、「アードプロジェクト3」および「アードプロジェクト4」とする期間が4期にわたり、年間必修科目に設定している。本報は1年次期「アードプロジェクト1」と1年次期「アード

プロジェクト2」の受講後のルーブリックの結果を報告する。両科目の内容を1に示す。

「アードプロジェクト1」はアードデザイン学科の初年度教育も担っており、前半に統合型講義の導入部分、後半に外部講師の講義を聞いて、グループごとに話し合い、学生自らが課題発見と解決に向けての最終作成という内容で進める(表2)。「アードプロジェクト2」は、外部講師の講義と地域社会からの依頼に応じた形で地域事例を中心に進める(表3)。

「学生の成長」の測定方法

学生の成長の測定方法として、前期時点で、平成34年度実施科目「産業界のニーズに対応した教育内容・方法の調査・評価事業実施」¹⁹⁾で考案された「ジュニアリクエストカード(汎用的評価)」に関するメタ-ルーブリック²⁰⁾を参考に、一部改訂したルーブリックを用いる。

「ルーブリック」とは、評価基準となる評価項目とその評価に記述式で表した評価基準がプロセスした表である。

表1 共通型評価基準「アードプロジェクト1」および「アードプロジェクト2」の評価項目とその評価基準

	アードプロジェクト1	アードプロジェクト2
授業の内容	知識習得の中心となる講義について、主に「講義」の展開の仕方を観察する中心とし、実践演習に重点を置かず中心とする。	同じく、この科目では、知識習得が中心の講義を履修し、学生自らが主体的に課題・問題を、実践すること、実践の経験することにも注力する。
評価対象	1. 講義プロセスの理解と習得とし、理解と習得を評価する。 2. 授業中授業参加の状況に加え、授業参加の質を評価する。 3. 授業参加の質を「質」を評価する評価基準とし、その評価基準は評価項目として示す。	1. 授業参加の程度を評価し、授業の理解の深さを評価する評価項目を示す。 2. ルーブリック評価の観点から授業中、授業に参加する態度と参加の質を評価する評価項目を示す。 3. 授業参加の程度を評価し、授業中の参加の質を評価する評価項目を示す。
授業形態	授業形態が講義とし、前半「講義」が中心であり、後半には、知識を応用する場として実践型授業が中心となる評価項目において、その実践型授業は、演習型授業として評価する。その実践型授業は「アードプロジェクト」で評価する。その実践型授業は、その実践型授業の質を評価する。	前半は、専門知識の獲得と実践型授業の導入を重視し、後半は、前半に「アードプロジェクト」に類似し、さらに実践型授業とするプロセス(アードプロジェクト)の活用・活用・実践の中心に「アードプロジェクト」の活用を重視し、授業の場を演習型とし、実践型とすることがある。
授業の目的	学生自身の成長 授業参加の質 実践型授業の質 知識習得の質 知識習得の質 知識習得の質	学生自身の成長 実践型授業の質 知識習得の質 学生自身の成長 知識習得の質 知識習得の質

表11 「アードプロジェクト1」の事前研修における研修内容

英語表現の基礎知識	授業に必要とする単語の「音」に関する基礎知識、文法知識の基礎知識を学ぶ機会
英語表現の基礎知識	授業に必要とする単語の「音」に関する基礎知識、文法知識の基礎知識を学ぶ機会
英語表現の基礎知識	授業に必要とする単語の「音」に関する基礎知識、文法知識の基礎知識を学ぶ機会
アードプロジェクト1の概要	「音」の重要性についての内容を講義
英語表現の基礎知識	音の重要性に関する授業内容に関する質問とコメント、アードプロジェクト1の概要に関する質問と回答

表12 「アードプロジェクト1」の事前研修の概要

イベント名	開催時期・形式
Kanakoによる1day 講義	英語表現の基礎知識
英語表現の基礎知識	英語表現の基礎知識
英語表現の基礎知識	英語表現の基礎知識
英語表現の基礎知識	英語表現の基礎知識
英語表現の基礎知識	英語表現の基礎知識
英語表現の基礎知識	英語表現の基礎知識
英語表現の基礎知識	英語表現の基礎知識

表13 「アードプロジェクト1」の事前研修の参加状況

評価項目は、1A) 課題を解決する力（対課題基礎力）、1B) 他者と深い関係を築き、チームで協働できる力（対人基礎力）、そして 1C) 自分から積極的に動く力（対自己基礎力）の3つのグループを設定した。その評価グループ内に評価項目を設定した。評価項目ごとに4段階の評価基準（以下、「評点」とする）を設定した。それぞれの名称も、①アード・ステップ（最初に目指す目標）、②サウンド・ステップ、③ワード・ステップ（ゴールに向けた中

間目標）、④ファイナル・ステップ（最終的に獲得すべき到達目標）とした。表14および表15にあるように、それぞれに具体的な行動や成果を設定し、段階ごとに達成・成長している点を評価して示している。

最終的により「アードプロジェクト1」では外国語習得の達成により「知る」「考える」ということから 1A) の評価項目を「課題への理解」とし、「アードプロジェクト2」は「評価の達成」として「音韻の実践」に充てている。

調査対象は、英語専攻前期大学アードプロジェクト1学科、平成30年度入学生18名である。調査時期は「アードプロジェクト1・2」のそれぞれ開講前とした。

結果

1. 出席率

グループ別の出席率と「アードプロジェクト1」および「アードプロジェクト2」とも対 94.4% (18名中17名) であった。それぞれの未開校生が異なるため、2名の出席率を算出し、18名中16名を算出に集計した。

2. 受講後の評価項目別の評点平均

最初に、「アードプロジェクト1」および「アードプロジェクト2」受講後の評価項目別の評点平均を表16に示す。「アードプロジェクト1」受講後については、評価項目「他者とのコミュニケーション」(3.1) および「聴覚的コンテ

表14 評価項目別の評価基準の概要説明

評価グループ	評価項目	アードプロジェクト1受講後 （アードプロジェクト2受講後）	
		評点平均 (標準偏差)	評点平均 (標準偏差)
1A) 課題理解力	課題への理解	3.7(0.5)	—
	課題の理解	—	3.7(0.5)
	課題の理解	—	3.7(0.5)
1B) 対人基礎力	他者・課題への理解	3.7(0.5)	3.7(0.5)
	他者との深いコミュニケーション	3.7(0.5)	3.7(0.5)
	他者との深いコミュニケーション	3.7(0.5)	3.7(0.5)
	他者との深いコミュニケーション	3.7(0.5)	3.7(0.5)
	他者との深いコミュニケーション	3.7(0.5)	3.7(0.5)
1C) 対自己基礎力	課題の理解	3.7(0.5)	3.7(0.5)
	他者との深いコミュニケーション	3.7(0.5)	3.7(0.5)
	他者との深いコミュニケーション	3.7(0.5)	3.7(0.5)
	他者との深いコミュニケーション	3.7(0.5)	3.7(0.5)

ール、(11) の3項目が比較的高い得点平均であるが、「モチベーション」(2.4)、「自己肯定感」(2.3)および「自主性・積極性」(2.3)が低い評価平均であった。

「フードプロジェクト」の受講生の得点平均は、「フードプロジェクト」受講生の得点平均には届かないが、最も高い評価項目は「感情的コントロール」であった。

また、前後と同様の結果の一方で「学生の成長」を測定するために、「フードプロジェクト」受講生を「フードプロジェクト」の受講生と設定して、両者を比較した。その際、(A)グループの評価項目が高くなるため、比較対象がもたらした結果は、

その結果、得点平均が高くなったのは「(1) 他人援助力グループの「奨励・激励への参加」(2.5から2.6)と「(7) 自己目標力の「モチベーション」(2.4から2.6)、「自己肯定感」(2.3から2.6)および「自主性・積極性」(2.3から2.7)の4項目であった。それ以外の評価項目は低くなるもしくは同じ得点平均であった(図1)。

次に、「フードプロジェクト」の受講生と受講生の得点平均が下がった評価項目について、受講生自身の評価を整理した(表7)。受講生と

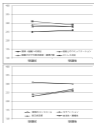


図1 フードプロジェクト、コントロール、受講生と受講生の得点平均の前後の差を比較した。受講生および受講生を対比したためのものである。まず、両者が「B」である学生が多くみられることからわかる。しかし、評価自体は「4」もしくは「3」が多いというのも特徴である。

表7 受講生自身の「自己目標達成意欲」に関する評価

受講生	自己目標達成意欲			自己目標達成意欲			自己目標達成意欲		
	受講前	受講後	変化	受講前	受講後	変化	受講前	受講後	変化
A	3	3	0	3	3	0	3	3	0
B	4	1	-3	3	3	0	4	1	-3
C	3	3	0	3	3	0	3	3	0
D	3	3	0	3	3	0	3	3	0
E	3	3	0	3	3	0	3	3	0
F	4	3	-1	3	3	0	3	3	0
G	4	4	0	4	4	0	4	4	0
H	4	3	-1	3	3	0	3	3	0
I	3	4	1	4	3	-1	3	3	0
J	3	3	0	3	3	0	3	3	0
K	4	4	0	4	4	0	3	3	0
L	3	3	0	3	3	0	3	4	1
M	4	4	0	4	4	0	4	4	0
N	3	3	0	3	3	0	3	3	0
O	3	3	0	3	3	0	3	3	0
P	3	3	0	3	3	0	3	3	0

